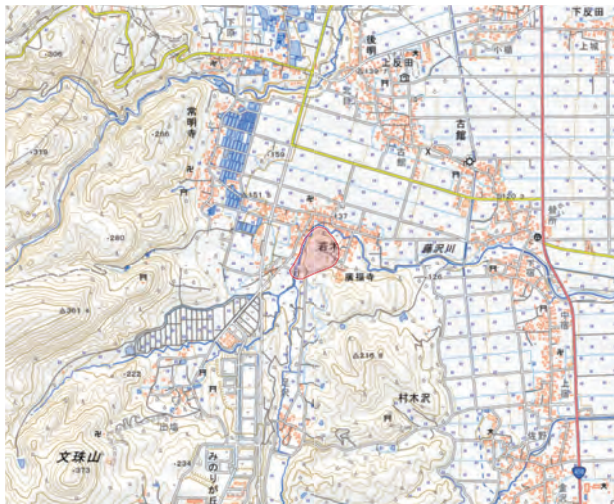


若木館跡

遺跡番号 201-232
調査回数 第1次
所在地 山形県山形市大字若木
北緯・東経 38度15分39秒・140度15分5秒
調査委託者 山形県村山総合支庁建設部河川砂防課
起回事業 若木 土砂災害対策事業費（砂防自然災害防止事業急傾斜）
調査面積 700㎡
受託期間 令和6年4月1日～令和7年3月31日
現地調査 令和6年6月11日～10月11日
調査担当者 渡辺和行（現場責任者）・小幡桃花
調査協力 山形市文化創造都市課文化財係
遺跡種別 城館跡
時代 中世
遺構 土坑・溝・柱穴・ピット・整地層
遺物 青磁・白磁・瓦質土器・古銭（文化財認定箱数：11箱）



遺跡位置図（S = 1:50,000）

調査の概要

今回の調査は、若木地区の土砂災害防止事業に伴った発掘調査である。調査区は工事用道路建設区・西調査区・東調査区の3か所に分けて行った。

いずれの調査区も現状の地形を記録することから調査を行った。次に遺構が確認される地層まで表土を掘削し、地面を平らに削りながら遺構を検出した。工事用道路建設区と東調査区は人力で、西調査区は重機で表土の掘削を行った。見つかった遺構を丁寧に掘り下げ、必要に応じて写真撮影や測量などの記録作業を行った。

いずれの調査区も遺構が良好に残っていた。東調査区の下段と西調査区については平坦面を作り出すための整地した層（整地層）が確認できた。

遺構と遺物

調査区毎に見つかった遺構・遺物について紹介する。

工事用道路建設区

工事用道路の建設によって削られる場所を調査した。この調査区のうち、西調査区に向かう箇所、江戸時代後半の土地造成と考えられる痕跡が確認された。

東調査区に向かう傾斜地では、テラス状の平坦面を作り出し、その後に埋め戻している状況が確認できた。埋め戻された堆積層から中国から輸入された15世紀頃の青磁や白磁、古銭（永楽通寶）と共に茶臼や火鉢といった石製品が出土している。

また、平坦面の直上では、木炭と焼土を多く含む遺構が検出された。その中から^{るつば}が出土している。このことから、金属の加工を館跡で行っていたと考えられる。遺構では柱穴が検出されている。何らかの建物が存在していた可能性を指摘できる。

東調査区

東調査区は上・中・下段に分けて調査を行った。上段

では多くの柱穴と溝が検出された。遺物は数点しか出土しておらず、遺構の時期は明確ではない。柱穴の形状は直径が小さく、深く掘りこまれるものである。この特徴は中世の柱穴によくみられるため城館が機能した時期のものと考えている。柱穴出土の炭化物に対し年代測定を行った結果、3点の内1点が1500年代、2点が1400年代を示している。

中段は範囲も狭いため、地山の地形をトレンチにて確認するに留まった。下段では、平坦面を作り出すための整地の痕跡を確認できた。また、斜面際で溝跡が確認されている。遺物は白磁の皿や15世紀から16世紀初頭に属するとみられる天目茶碗の破片が出土している。

西調査区

西調査区では、調査区の北側で平坦面を作り出すための整地層が確認された。整地層は2時期に分けられるとみられる。整地層から出土した炭化物を年代測定した結果、15世紀代を示した。いずれの整地層の上面からも少ないながら柱穴や溝が検出された。整地層の中からは15世紀ごろの青磁が出土している。他に茶臼や石鉢などが出土した。調査区の南側には整地層がなく、地盤が安定していた。そこには柱穴が集中しており、検出した柱の軸線がそろっているものがあることから建物の存在が考えられる。建物の配置については検討中である。

まとめ

若木館跡は1438年に、新関吉綱が築城したとされている。今回の調査で出土した遺物には15世紀のものが一定数あり、伝承を裏付ける結果が得られている。また、輸入磁器や茶臼など、中世の城館でよくみられる遺物も

出土している。

整地層の存在から、この館跡がいずれかの時期に大規模な造成をされていることが判明した。年代測定の結果から15世紀代もしくは16世紀前半に行われた可能性が高いが、どのような要因で整地層の造成が行われたか判断が難しい。文献では、若木館跡は17世紀初頭に廃絶することが知られているが、遺物の出土量からみると、15世紀に比べ16世紀および17世紀の遺物が少ない。この時期は戦国時代にあたり、15世紀段階と16・17世紀では館跡の使用方法などが変化していた可能性がある。今後の検討課題である。



写真2 東調査区上段完掘状況



写真3 西調査区: 南側遺構集中部



写真1 若木館跡の空撮写真と調査区の配置



写真4 工事用道路建設区から出土した遺物